



Title	古墳時代から古代における須恵器甕生産
Author(s)	木村, 理恵
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 679-684
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105080
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古墳時代から古代における須恵器甕生産

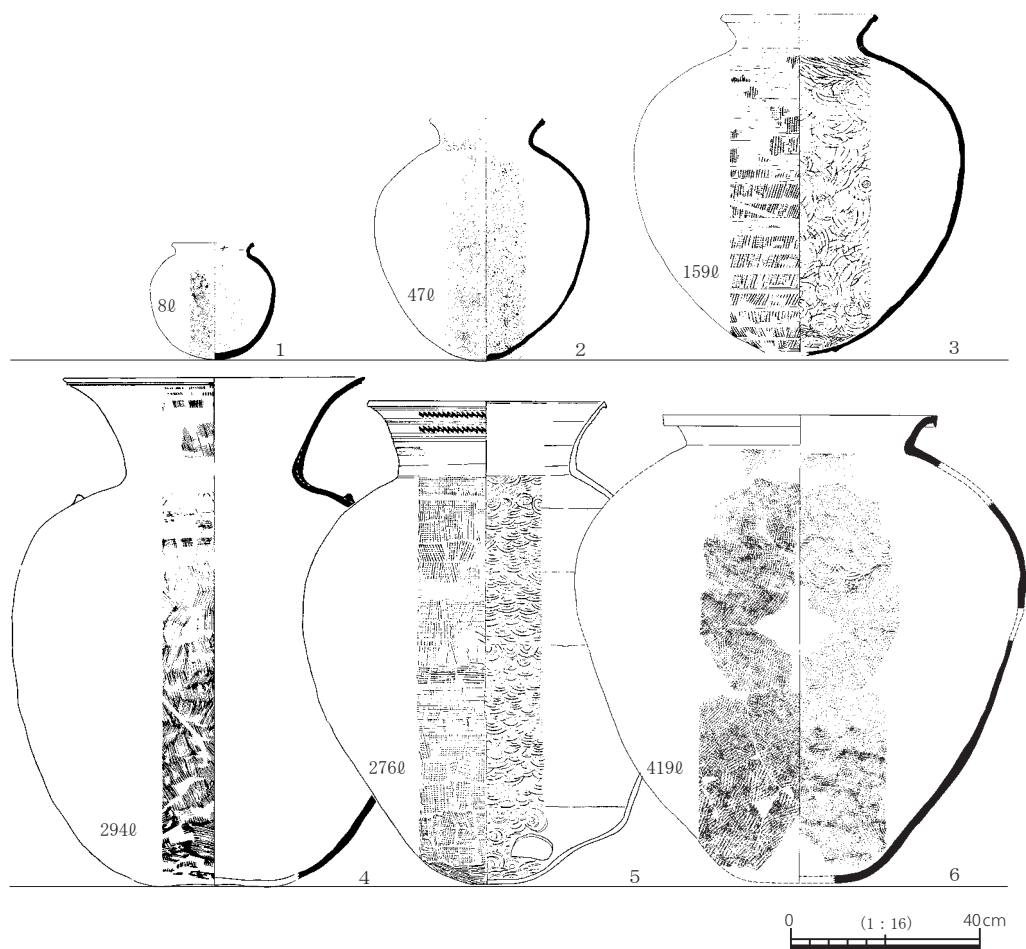
木村 理恵

はじめに

須恵器の形質的特徴を最大限に活かした器形である甕は、古墳時代以来、古代に至るまで貯蔵具として重用されてきた。須恵器甕は口縁部に工人の癖（工人差）が最も表れやすいことから、筆者はこれまで須恵器甕の口縁部形態に注目して、工人差および地域差の把握を試みてきた（木村 2012・2023）。本稿では、よりマクロな視点で、地域を越えた須恵器甕の大枠でのプロポーションの変化を指数化し、グラフで視覚化することを目的とする。

1. 甕の口頸部の変化

古墳時代から古代への須恵器の形態変化は、頸部が長い甕から頸部が短い甕への変化といえることができる（図1）。鳴滝遺跡から出土した初期須恵器の甕は、口頸部が長く大きく外反し（図1－4）、肩部に突起状のつまみをもつこと、胴部外面に横方向の平行タタキ痕跡がみられること、底部内面には絞り痕跡がみられることから、伽耶地域の陶質土器の甕の影響を受けるとされる（仲辻 2017、木下 2023）。口縁部径（口径）が 60.2 cm、器高が 102 cm、頸部高が 19.4 cm、胴部最大径が 80.8 cmを測る。石光山 51 号墳出土の甕は、鳴滝遺跡のものよりも頸部が短く、口径が 50.2 cm、器高が 102.4 cm、頸部高が 15.6 cm、胴部最大径が 77.4 cmを測る（図1－5）。平城京左京六条三坊で出土した須恵器甕は、8 世紀後半から 9 世紀前半のものであり、垂下形縁带状口縁（以下、縁带状口縁と呼ぶ）をもつ。縁带状口縁とは、大阪府南部に位置する陶邑窯跡群で生産された甕に特徴的な口縁部形態で、口縁端部が下方へ垂下し、長く発達した結果、外面の立面的な見え方が縁帯にみえる口縁形態である（木村 2019a）。頸部が短く、胴部が張った形態であり、口径が 56.4 cm、器高が 96.6 cm、頸部高が 6.2 cm、胴部最大径が 92.6 cmを測る（図1－6）。このように大型甕のプロポーションは、時代が下るにつれ、頸部が短くなっていく。器高に対する頸部高を指数化して、グラフで把握すると図2のような結果になる。計算式は、頸部高／器高×100 であり、頸部が長いと値が大きくなる。鳴滝遺跡の甕（4）は縁带状口縁の甕（6）に匹敵する口径であるが、同じようなサイズの口径でも、初期須恵器のものは頸部が長いことから、より上部にドットが位置する。このように同じ口径の甕でも、器高



1・2：橿原市十市蔵場遺跡出土、3：紀の川市北山廃寺出土、4：和歌山市鳴滝遺跡出土、
5：葛城市石光山51号墳出土、6：平城京左京六条三坊出土

図1 古墳時代から古代の須恵器甕

に対して頸部高の割合が大きい場合、胴部で確保できる容量に限られる。また図3で提示するように、縁带状口縁の甕に比べ、初期須恵器の胴部最大径が小さいことも容量が限定されることにつながっている。図2・3で使用している石上神宮と布留遺跡で各1点ずつみられる須恵器大型甕や、平城京や長岡京出土の縁带状口縁をもつ甕は、奈良時代～平安時代初頭の大型甕であり、完形復元できるものを数値化した（木村 2020、岡田 2023）。これらは器高に対する頸部高の割合が小さく、グラフ上では右下のエリアに位置する（図2）。

古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器甕とされる十市蔵場遺跡からは小型・中型の甕が出土している。図1－1・2は小型の甕であるが、小型の中でも法量が分化する。北山廃寺から出土した須恵器甕は容量200ℓ未満の中型甕である（図1－3）。1～3は、7世紀代を中心とする

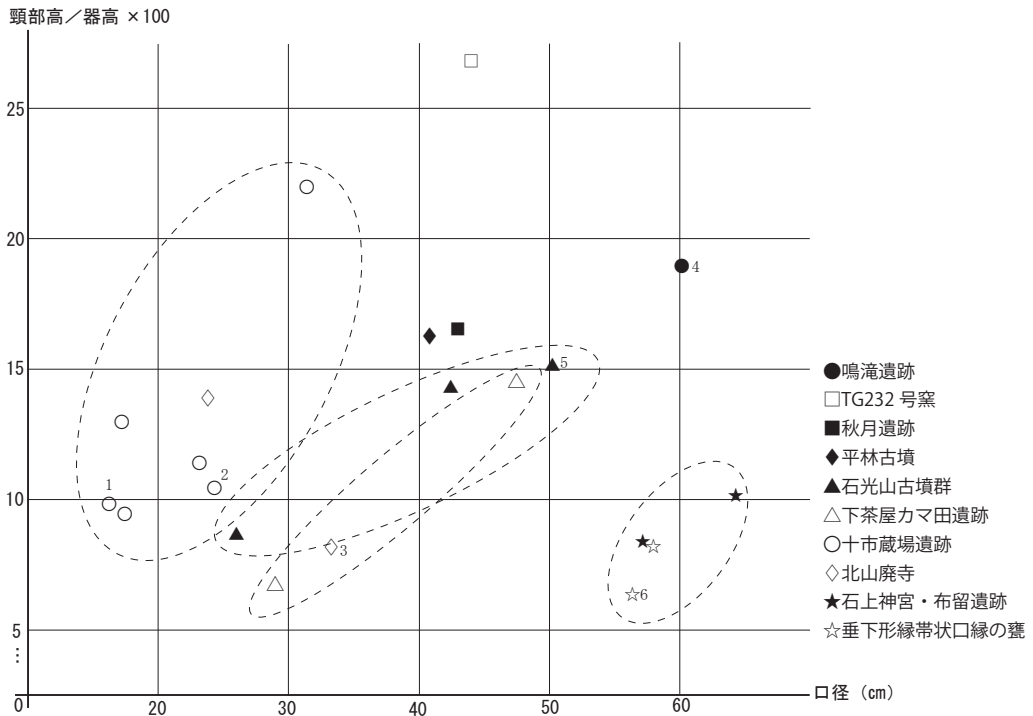


図2 須恵器甕の器高に対する頸部高の割合（数字は図1の番号に対応）

年代幅で捉えられるが、器高に対する頸部高さが低くなり、指数としても相対的に小さい値を示している（図2）。奈良時代以降の大型甕の値に近く、古墳時代的な長い頸部をもつ壺形の甕形態からより古代的な頸部の短いプロポーションに近いことが読み取れる。頸部が短くなるのは、装飾的要素よりも中身を出し入れしやすいより機能的な部分が重視されるようになったためと考えられる（木村 2019b）。

2. 胴部最大径に対する口径の変化

胴部最大径に対する口径の値を、口径/胴部最大径 × 100 で指数化し、グラフで提示した（図3）。口径と胴部最大径が同じ値になると、指数が 100 を示す。よって 100 より小さければ、胴部最大径の方が大きく、100 より大きい値になれば、口径の方が大きいといえる。

鳴滝遺跡の甕は値が 80 前後であり、縁带状口縁をもつ甕をはじめとする古代の大甕の値が 50 ～ 60 であることから、口径 60 cm 前後と同じような口径であっても、胴部の膨れ具合が、時代を下るにつれ、大きくなっているといえる（図3）。古墳時代の大甕より奈良時代の大甕の方が、容量がより確保できる形態であるといえる。

また初期須恵器の陶邑窯・TG232 号窯の須恵器甕（口径 40 ～ 50 cm 前後）の値は 60 ～ 70 前

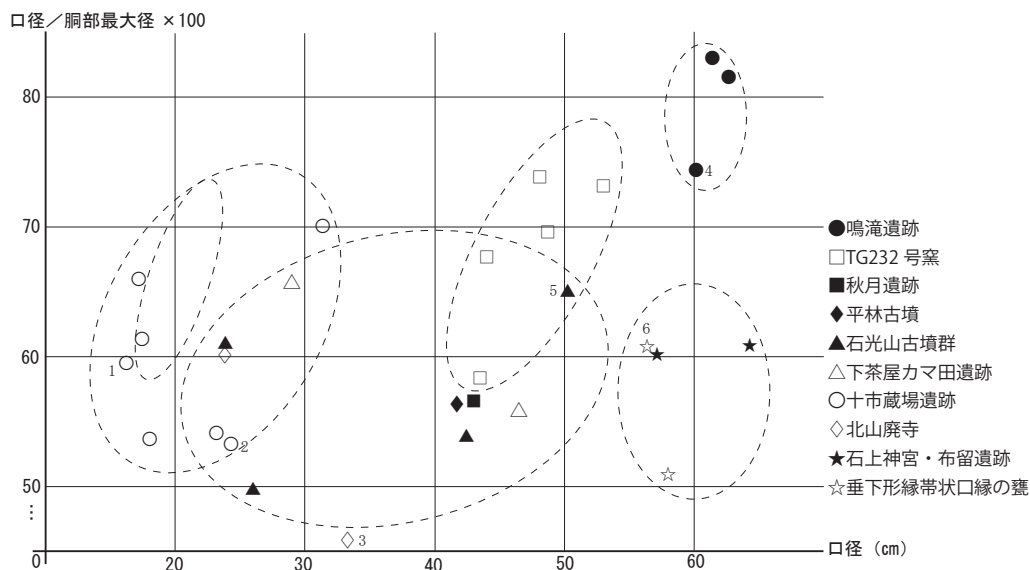


図3 須恵器甕の胴部最大径に対する口縁部径の割合（数字は図1の番号に対応）

後であり、少し年代が下る石光山古墳群などの甕（口径40～50cm前後）の値が60前後であることから、やや胴部に膨らみをもたせるようにプロポーションが変化しているといえる。

北山廃寺の甕（図1-3）は口径に対して胴部最大径が大きく、胴部が膨らんだプロポーションであり、頸部も短く、奈良時代的な甕の形態に近づいているといえる（図2・3）。

3. ま と め

古墳時代から古代にかけて、甕のプロポーションは、壺形から胴部の張った甕形へと変化する。つまり内容物を出し入れしやすい形態への変化といえる。この背景に都城をはじめとする大消費地での生産活動、酒造りをはじめとする各種産業の増加があったのではないかという見通しを持っている（木村2019b）。

奈良時代後半以降に量産され始める陶邑窯跡群の縁带状口縁をもつ甕は、広い口縁部、短い頸部、胴部を最大限膨らませて容量を確保した、生産道具として利用しやすいように作られているといえる。ただし、縁带状口縁をもつ甕の中でも、口縁端部の発達の状況や、胴部の膨らませ方にバリエーションがあることから、系統差および時期差を追っていくことを今後の課題としたい。

本論では奈良県と和歌山県の資料を中心に、主なものを対象としたにとどまるため、資料数を増やし、甕のプロポーションの数値化および容量の把握を今後の課題としたい。

謝 辞

土器を読む会および紀和研究会の皆様には、有益なご助言を賜った。感謝申し上げます。
小森俊寛、三好美穂、富加見泰彦、青柳泰介、浜崎範子、中西瑠花、仲辻慧大、金澤 舞、
木村日向子、平井洸史（敬称略）

引用・参考文献

- 泉森 皎 1987「大和の「須恵」と窯跡群」『文化史論叢（上）』横田健一先生古稀記念会 創元社、大阪：
pp. 525-543
- 植野浩三 2000「大和における須恵器生産の特質」『文化財学報』第十八集 奈良大学文学部文化財
学科、奈良：pp. 1-24
- 大阪府教育委員会・大阪府埋蔵文化財協会 1995『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』、大阪
- 岡田雅彦 2023「平城京左京四条三坊、六条三坊、東三坊坊間路」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）
2022 年度』奈良県立橿原考古学研究所、奈良
- 橿原市 2024『十市蔵場遺跡』、奈良
- 上村憲章 1999「容量から見た甕」『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』真陽社、京都：
pp. 355-370
- 木下 亘 2006「須恵器から見た葛城の物流拠点」『葛城氏の実像—葛城の首長とその集落—』奈良
県立橿原考古学研究所附属博物館、奈良：pp. 91-94
- 木下 亘 2023「初期須恵器にみられる地域色—和歌山県紀ノ川下流域を中心として—」『橿原考古
学研究所論集』第十八 奈良県立橿原考古学研究所、奈良：pp. 165-175
- 木村理恵 2010「須恵器大甕からみる古代の窯業生産—近畿地方を中心に—」『古代窯業の基礎研究
—須恵器甕の技術と系譜—』窯跡研究会、京都：pp. 771-783
- 木村理恵 2012「藤原官期の須恵器供給体制に関する研究—貯蔵具・甕からのアプローチ」『文化財
論叢』Ⅳ 奈良文化財研究所、奈良：pp. 291-316
- 木村理恵 2018「大甕の変遷とその歴史的背景—古墳時代から近代まで—」『待兼山考古学論集』Ⅲ
大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 813-826
- 木村理恵 2019a「大甕の生産・流通の変遷について—垂下形縁帯状口縁をもつ大甕を中心に—」『第
22 回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と大甕』独立行政法人国立文化財機構奈良文化
財研究所、奈良：pp. 123-133
- 木村理恵 2019b「甕からみた商業生産の萌芽」『ヒストリア』第 277 号 大阪歴史学会、大阪：
pp. 1-22
- 木村理恵 2020「古代における布留遺跡とその周辺遺跡の様相」『大和布留遺跡における歴史的景観
の復元』研究紀要第 24 集 公益財団法人由良大和古代文化研究協会、奈良：pp. 131-137
- 木村理恵 2023「畿内周辺の須恵器生産と流通—古代伊賀地域を中心に—」『Mie history』Vol. 30
三重歴史文化研究会、三重：pp. 45-64
- 巽 淳一郎 1991「都の焼物の特質とその変容」『新版〔古代の日本〕第六巻 近畿Ⅱ』角川書店、東京：

pp. 263-284

巽 淳一郎 1992『平城宮・京出土須恵器の分類と産地同定』平成元年～3年度科学研究補助金（一般研究C）研究成果報告、奈良

巽 淳一郎 1995「奈良時代の甕・甕・正・由加一大型貯蔵用須恵器の器名考証」『文化財論叢』Ⅱ 奈良国立文化財研究所、奈良：pp. 311-324

仲辻慧大 2017「楠見式土器の生産とその特質」『考古学・博物館学の風景 中村浩先生古稀記念論文集』中村浩先生古稀記念論文集刊行会、東京：pp. 19-28

仲辻慧大 2021「神領10号墳出土土甕からみえる初期須恵器生産の特質」『大隅大崎神領10号墳の研究Ⅱ』鹿児島大学総合研究博物館、鹿児島：pp. 85-92

奈良県立橿原考古学研究所 1976『葛城・石光山古墳群』、奈良

奈良県立橿原考古学研究所 1994『平林古墳』、奈良

奈良県立橿原考古学研究所 1996『南郷遺跡群Ⅰ』、奈良

富加見泰彦 2015「古墳時代集落址・生産遺跡研究の歩み」『紀伊考古学研究』第18号 紀伊考古学研究会、和歌山：pp. 23-32

前田敬彦 2015「和歌山県における古墳時代土器研究の歩み」『紀伊考古学研究』第18号 紀伊考古学研究会、和歌山：pp. 33-60

和歌山県教育委員会 1984『鳴滝遺跡発掘調査報告書』、和歌山

和歌山県文化財センター 1994『秋月遺跡』、和歌山

和歌山県文化財センター 2012『北山廃寺、北山三嶋遺跡』、和歌山